

---

# 東方崩天歌

皿舵 ツナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方崩天歌

### 【Nコード】

N9948X

### 【作者名】

皿舵 ツナ

### 【あらすじ】

この物語には独自の解釈や性格改変が含まれておりますので閲覧の際には注意して下さい。

幻想郷に一ヶ月前に幻想入りした神界の住人。

この物語は神界の住人と幻想郷の住人が織り成すいつもの日常……なのかな？

## 崩天歌ノ一『天使』

「目は覚めたかしら？小さな小さな天使さん？」

目覚めた私の前に立ちはだかったのは傘と扇子を持った金髪の美女だった。

「……ここをどこだか知つての行いですか？」

「ええ……用があるのはこの扉ではない、用があるのは貴方よ。」

「……………私？」

長い沈黙。長い睨み合い。

どうして私に用があるのか分からない。こんな出来損ないの私に。その金髪の人は私に微笑みながらこう言った。

「幻想郷に來ない？」

その言葉が私の人生を180度大きく変えたのかもしれない。

この話は出来損ないの天使と幻想郷の住民が織り成す不思議な不思議な物語。

## 東方崩天歌

いざ開幕。

妖怪の山の裏に存在する中有の道。　ここには死者生者問わず通る道だ。

一ヶ月前にここに扉ごと引越してきた私こと天道てんどう　許斐このみはいつも通り扉の番をしていた。

私がいま守っている扉は天門と呼ばれる扉で天使の住む天界と幻想郷を繋ぐ唯一の扉だ。

それを守っている私も天使で、さらに位階が低い天使を纏める班長なのだが……一身上の都合で同僚からの信頼も無く、さらに全ての天使を纏める長も私との接触をなるべく避けている。しかし私自身はそんなに気にしてはいない。特に幻想郷に来てからは。

「班長く交代の時間ですよ。」

妖怪の山から人影が二つ見える。声の主は聞き慣れた後輩の声であつた。

桃園ももこの 湮かいり。私の班に所属している後輩天使。年は150歳。（天使の中ではまだ若い。）紺色の短い髪に黒い瞳の少し幼い風貌が印象の元気な子だ。

「湮。もう交代でいいの？」

「班長こそもう三日も休んでいないじゃないですか。あとは任せて下さい。」

と湮は無い胸（揺れない震源地）を張った。

「ならお言葉に甘えて……そちらの方は？」

私は和服を着た短い髪の少女へ目を向ける

「稗田 阿求さん。人間です。なんでも一度班長に会ってみたいだとか。」

「初めまして、私は天道 許斐です。」

「こちらこそ始めまして。稗田 阿求と申します。今回は神界や天使達について詳しくお聞きしたいのですが……お時間の方は大丈夫ですか？」

「えっと……湮！？」

「大丈夫です班長。神様もいませんし、五日は休めるはずですからゆつくりしていつて下さい！」

「ありがと。それでは阿求さん。手間をおかけしますが、説明がてら人里に行きたいので人里に行ってもよろしいでしょうか？」

「いいですよ。急に押しかけてきたのは私の方ですから。」

と阿求は深々と頭を下げる。それにつられて私もつい頭を下げてしまった。

それを見て湮はクスクスと笑う。

「では少々不安定な空の旅になりますが、ご同行を。」

と言つて私は阿求さんをお姫様抱っここの様に抱いた。

「……湮さんといい貴方といい……天使とはこのような大胆なもので？」

「この方が私達にとって飛びやすいんです。」

私はそう言うとき大きな翼を広げ、春の麗らかな空へと飛び立った。いい飛行日和だ。

私と阿求さんは人里の門の前に降り立ち門を通り抜ける。

人里は今日も人間やら人妖やらで賑わっていた。

食事をするだけなら中有の道の屋台でも出来るのだが、あそこの

屋台は地獄に行くぐらいの犯罪者が経営していると聞く。

いくら祭好きの人間が行くとはいえ私は滅多に行かない。人里の方がゆつくりと食事が出来るし、里の人達は新参者の私でも皆親切にしてくれるからだ。

「折角ですから食事でもどうですか？私は湊さんと食べてきたので貴方だけになりますか……情報提供のお礼ということで。」

「ではお言葉に甘えましょう。」

そんな話をしながら私と阿求さんは歩を進めて行く。

もちろんの事だろうが羽はしまつてある。通行人の邪魔だからだ。しばらく人里の人混みを掻き分けて行くと、大きな屋敷の前に着いた。

「ここが阿求さんの屋敷で？」

「そうです。では案内しましょう。」

私はお邪魔しますと言い、屋敷の門をくぐる。

大きな庭を歩き、屋敷の中へと入る。屋敷の中には使用人と思われる人とすれ違った。こんなに大きな屋敷なのだから当然だろう。そして辿り着いたのは畳が敷いてある和風な客間であつた。

「食事は使用人が持つてきますので少々お待ちを。では質問しますかよろしいですか？」

阿求さんは私と対面するようにちよこんと座つた。

「私の話せる範囲であれば何なりと。」

「まずは神界とはなんですか？」

「神の住む世界、言葉のまんまです。神様が作り、そこに住んでいればそこは神界と言えます。」

「神界にいる神様は一人で？」

「大体は、ただし二人や三人の場合も稀にありますね。」

「では次に天使の事についてですが……まず制服はその白いワンピースなんですか？湊さんも着てましたし。」

「そうですね。でも私達全員を纏める天使長や神様の秘書だとかは自由な服装ですね。」

「天使の寿命は？」

「ありません。ただ寿命が無くとも滅びはします。特定の条件下のみですが、それは機密事項です。」

「最後は羽についてお願いします。」

「羽は自由に生やしたりしまうことも出来ます。一応一人持って飛べるぐらいの力があります。」

私が説明終わると阿求は一息ついた。

「大体こんなものですかね……ありがとうございました。」

「でもいいんですか？メモもとらずに。」

「記憶力だけはいいいですよ。」

阿求は苦笑するように笑う。

私もつられて苦笑していると、使用人らしき初老の男が料理を運んできた。

「では、いただきますね。」

「お構いなく。」

私は遅い昼ご飯にありつくのであった。

「それにしてもこんなにも口外していいものなんですか？貴方達の世界の事を。」

「大丈夫ですよ。こんな時の為に神様から許可は出ていますから。」

「それで貴方の神様は今何処に？」

「多分マヨヒガです。紫様が住んでいる。」

「て事は貴方は八雲 紫に面識が？」

「神界で初めて会ったのは多分私ですから。」

正確には神界への扉の前で、なのだが。

「ふむ、様付けしているのを見ますと随分とお世話になったようですね？」

「ええ……それは色々ですが。」

私は溜め息をつきながら言った。

「相当苦勞なさっているようで。」

「はい。私が仕えている方も天真爛漫な方で……紫様と同じくらい

に手を焼くぐらいですね。」

私は箸を置きごちそうさまでした。と言うと阿求もお粗末さまでした。と頭を下げる。

「許斐さんはこの後どうなさるんですか？」

「近くの居酒屋に行きます。神様の友人が経営している店です。」

「そうですか。では道中気をつけて。」

と言い頭を下げる阿求。それに対して私も頭を下げる。傍から見れば頭を下げるすぎだと言われても仕方ないくらいだ。

「それではお邪魔しました。」

私は稗田邸を後にして目的の居酒屋へと歩を進めて行くのだった。

## 崩天歌ノ二『天使の昔話』

しばらく人里を歩いて5分……私は行きつけの居酒屋の前に辿り着いた。

看板には『居酒屋 武士道』と書かれている。

確かこの店の女将は戦国時代の戦乱の中を生きていたと話していた。

今は亡霊として幻想郷に腰を据えているのだが……。

店の引き戸を引くと、昼間ながらまるで宴のように客達は酒を呑んでいた。

私がたちつくしていると、目的の人物に話しかけられた。

「あら、許斐ちゃん。いらっしやい。」

「こんにちは葵さん。」

あおい くれは  
葵 呉葉。

『居酒屋 武士道』の女将でとても気前のいい人。神様も一目置いていて、よく紫様とここに呑みに来ている。

「ふふ……やっとお暇が取れたようで。」

「はい、二週間振りでしょうかね？」

と言つて私は呉葉さんの目の前の席に座る。

ちなみに呉葉さんの前の席に座る＝一夜越し確定というのが常連客の中での習わしとしているらしい。

「いいの？こんな昼間から私の前に座つて。」

「はい……葵さんと話したい気分でしたから。」

「ならゆつくりとしていくといいわ。許斐ちゃんも常連客になりつつあるわね。」

葵さんは微笑みながらお酒を注いでいる。

葵さんは赤い瞳を持つ美しい顔立ちもそうだが、長い黒髪とボンッキュッボンッな体型を持つまさに極上の美人というべきお方である。

黒髪は後ろで結んでおり、前髪は右目を隠すように分けている。それがまた堪らないらしい（常連客のスケさん談）。

また体型に関してもこちらから見る限りでは胸はかなり大きい。また立った時に見たその体型はまさに理想ナイスバディと言つに相応しいと言われる（常連客のカクさん談）。

私が葵さんをジロジロと見ていると、葵さんは悪戯な笑みを浮かべて、あら？そんなにこの胸が気になるの？と茶化してきた。

「それは……そうですね。同性の私から見ても葵さんは魅力的ですし……。」

「そう？私は重くて動きにくいと常々思っただけだね。」

葵さんはそう言っているが、それでも私はその体型に憧れを持っていた。

常連客も葵さん目当てで来る者も多い。まあ、葵さんと話すなら一夜越しは覚悟しなければならぬのだが。

「許斐ちゃんもその内に大きくなるわ。」

そう言いつつ葵さんは徳利を私の目の前に出す。

「1000年以上も生きているのにこの先大きくなるんですかねえ

……。」

私はそう言いつつおちょこにお酒を注いで一口飲んだ。

「そういえば後ろの大きな刀はなんですか？」

「この事かしら？」

葵さんは後ろにおいてある刃渡り5尺になるだろう刀を手取る。

「この刀は私の父から譲り受けた私の宝物よ。今でもこの切れ味は落ちてないわ。」

そう言つて葵さんは刀を抱き抱えた。

「ではやはり剣の腕も相当では？」

「いや、私は刀に少し頼り過ぎな面があるから……それほどでもないわ。」

「そんなことはないわ」。妖夢の稽古をつけてくれたぐらいだもの。

「

ふと私の横から女性の声が聞こえた。

「ゆっ、幽々子様っ！？驚かせないで下さい！！」

そこには白玉楼の主、西行寺 幽々子が平然と私の隣に座っていた。

「私ならついさっきからいたわよ？貴方がこの店に入った時からね。」

全く気づいてなかった……。

「いらっしやい幽々子。一晩いけるの？」

「たまには呉葉と話したいものよ。」

「それは嬉しいわね。」 葵さんは嬉しそうに笑みを浮かべた。

葵さんは接客にも定評があり、リピーターも多いと言われる。

ちなみに私もその一人になるつもりだ。

「そういえば紫も彼の慈母神様と来るようだし。あ、焼鳥五皿と焼酎一本。」

「えっ………？」

私は慈母神という言葉に思わず手に持っていたおちよこを落としそうになった。

「幽々子様……一つ確認したいことが……」

「何かしら？」

「神様が来るって本当ですか………？」

「ええ、今日は自慢の天使が休暇で来るはずだから藍を連れてどうかしらっつて。」

私は頂垂れて机に突っ伏す。

「あの方は……職務もほったらかしにしておいて……。」

「あらあら？何かあったのかしら？」

幽々子様が興味を持ったように聞いてきた。

「あの人は……この幻想郷に来てから職務をほったらかしにしてぶらぶらこの世界を歩き回っているんですよ……。」

私は机に突っ伏したまま言った。

「でも紫達の話聞くようだ」と職務は一遍にやっているようだし、

問題ないと思うのだけれど？」

「確かに書類などの職務はそうですが……さすがに他の神が来て話をするような社交的な職務となると……私達は下っ端ですし。」

「でも以前は仕事をこなしていたんでしょ？ ストレスが溜まっていたんじゃない？」

「それはそうですね……度が過ぎます。」

私は空になった徳利を葵さんに差し出す。

葵さんは徳利を受け取ると次の徳利を私の前に差し出した。

「……確かに私が羽を伸ばしてきて下さい、って言ったんですけどもね。私から見ても働きすぎだってくらいですから。」

「休むという事を知らなかったって事ね。」

「神様って以外なところで厄介なんです。疲れ知らずですから24時間ずつと書斎に籠っていたって時もありましたし、他の神様に会う為に一週間神界からいなくなるって事もありました。話すと長くなるので省きますが、とにかく慈母神としての自覚を持つてからは職務に忠実になってしまっ……。」

「でも何故貴方は幻想郷に来てからカミサマに羽を伸ばせって言ったのかしら？」

「人々に忘れられたからです。」

「忘れられた？」

「正直な話、慈母神としては今の神様より前のイザナミ様の方が有名でした。イザナミ様の死後は今の私が仕えている神様なんですけど……どんなに頑張ろうともイザナミ様には遠く及ばなかった。」

「それで段々と信仰が無くなって？」

「はい、特にキリスト教が大きく普及してきた時は特に。その時から神様は薄々と忘れ去られたと悟ってきたのです。しかし、忘れ去られてきたとしても慈母神としての力をイザナミ様の祀る神社に与え続けてきました。それは慈母神としての使命かそれとも自身の意志か。私には後者だと思いますが。」

私は一口お酒を飲む。

「そして紫様が私達の下に来ました。幻想郷に来ないかって。最初は私も神様も反対しましたが、ふとこの言葉が私の頭に突き刺さったんです。幻想郷は来るもの拒まず、例え天使だろうが忘れ去られた神だともね、と。その時に私は自覚しました。忘れ去られたんだあつて。本当は神様自身も分かっていた事なんですが私がこう言っただけです。もう私達がいなくともやっていける、私達がやれることはやってきた、後は他の神様に任せようって。その言葉で神様も了承してくれました。それで今に至ります。」

私は話を終えてもう一口お酒を飲む。

「忘れ去られた、か。」

幽々子様は感慨深くそう言った。

「はい……私達は1000年以上も渡ってやって来ましたが……限界だったようです。」

「でも1000年やってきたのなら頑張ったんじゃない？」

「でも……………」

「涙……拭きなさいな。十分誇れる事よ。」

幽々子様に指摘されて泣いている事に気付いた。

私は葵さんからおしほりを貰って涙を拭く。

「許斐ちゃん。貴方の神様は忘れ去られながらも前代のイザナミ様のご意思を汲んで1000年以上もイザナミ様の力を護り続けた。それって偉大な事よ？自分の信仰を氣にかけず、前代の信仰を護っていたのだから。」

「そう言われてみると神様は氣にしていませんでした。自分の信仰の事を。」

私は苦笑を浮かべる。

「ところで……許斐ちゃん？」

「なんしょうか？葵さん。」

「天使って元々はキリスト教の神に仕えるものだと言った事があるんだけど……何故貴方は日本の神様に？」

「それは5世紀に一度キリスト教が伝えられたからです。私達はキ

リスト教が伝わるのに合わせて日本に派遣されました。神様は私達を見てすぐに気に入ってくれました。その時から私達は仕えています。」

「不思議な話ね……日本の神に西洋の神の御使いが仕えているなんて。」

「ええ、今思うと私も不思議で仕方ありません。」

私は笑みをこぼす。

葵さんは私が笑みを浮かべたのを見ると

「さて、しみりとした話はおしまい。後は楽しくお酒を呑んでいてね。」

「……………はい。」

私は元気よく返事を返した。

## 崩天歌ノ二『天使の昔話』（後書き）

一話、二話共に説明回になってしまったと今更ながら後悔。

稚拙な文章ですがこれからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9948x/>

---

東方崩天歌

2011年10月29日14時28分発行